



④「フレームの丘」の表札の前で、犬たちにエサを与える矢野さん(手前)と町さん。⑤「オシアン」ファームを動物の安らぎの場に。それが大井さんの目標だ

「オシアンファーム」には十三頭の馬のほか、九匹の犬、五羽のニワトリ、一匹のウサギがいる。そのエサ作りは、町さんと矢野さんの仕事だ。

犬たちの主食は、登別の給食センターから週一回もらってくる給食の余りのパンやご飯。これにドッグフードや野菜などを混ぜて大なべで煮込む。分散してつながれている犬に

エサを与え終わると、その足で隣の牧場の入り口へ、鳴きながら、七匹の猫が寄ってくる。昨年春から町さんたちをすっかりあてにしている野良猫の二家族だ。

犬たちの大半は、不幸な過去を持っている。飼い主に捨てられ、処分されたかった犬、捨てられた犬、近くの養鶏場から譲り受けたニワトリも、卵を産まなくなつて廃鶏になる寸前だった。

場長の大井さんらは、牧場の立つこの丘を「フレームの丘」と呼んでいる。名付けたのは町さん。グリム童話の「フレームの音楽隊」から取った。フレームの音楽隊」では、年老いて、人間から邪魔者にされたロバ、犬、猫、ニワトリがフ

フレームの丘

走り終えてい

5

余

生

登別市富浦の太平洋を見下ろせる丘にある。経営者で場長の大井昭子さん(みづこ)、町みどりさん(み)、矢野千香子さん(み)、女性三人が、引退した競走馬の世話をしてい。馬はオフレッドとアラフ台わせて十三頭。老馬が大井だ。

オシアンファーム

動物の安らぎの場に

レーメンの音楽隊入りを自指して旅をするが、その一行が最後になつて着いたのがこの牧場、というわけだ。

フレームの丘の表札がかけられた母屋の前で、大井さんは「この丘を、馬と人間を中心動物が安らげる場所にしたいの」と話す。

毎年、競馬の世界から引退していく馬は、中央、地方を合わせてさつと八千頭。「繁殖用」「乗馬用」などが主な引退理由だが、実際には処分されてしまう馬も多い。日本中央競馬会には、競馬で活躍した功馬の面倒をみる制度があるものの、日本ダービーなど九大競馬の優勝馬で、馬主が同会に寄贈した場合に限られるなど、条件が厳しく、恩恵にあずかる馬は少ない。

夜の給餌(じ)時間になった。厩舎(きょ)きゅうしきのシャッターを開けると、馬たちが一斉にいなないてエサをせがんだ。一頭一頭首をさすりながら大井さんが言った。「この馬たちは、今の生活を絶対喜んでいる。毎日ニコニコしてるもの。今は競走馬の余生なんて考えている人は少ないけど、これからは増えてくると思う。そういう世の中は、今よりきっと温かいと思うわ(おわり)」

文・松浦 真一(記者)
写真・河野 正敏(記者)